

## 青山悟 「時間マシン | Time Machine」

日時：2026/7/4(土)～7/25(土) 12:00 - 18:00 \* 日月祝休廊

会場：imura art gallery 協力：ミヅマアートギャラリー

オープニングレセプション：7/4(土) 17:00-18:00 作家在廊



《時間マシン Time Machine》 ポリエステル・オーガンジーに刺繍 (ポリエステル糸)、2026

撮影：宮島径 / Photography by MIYAJIMA Kei ©AOYAMA Satoru, Courtesy of Mizuma Art Gallery

この度、イムラアートギャラリーでは青山悟の個展「時間マシン | Time Machine」を開催いたします。

青山は、高校時代に渡英し、ロンドンのゴールドスミスカレッジでテキスタイルアートを学びました。ジェンダースタディーを基礎とするこの学科にはマシン室があり、青山はそこで工業用マシンによる制作を始めます。

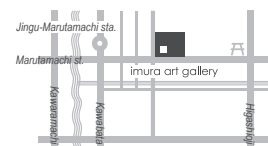
2012年、セルビアのベオグラードで開催されたグループ展「Photo-Reference: Photographic Image in Contemporary Japanese Art Practices」にて、青山は佐藤雅晴、城田圭介と出会いました。写真というメディアを使いながら、異なるアプローチで制作をする日本人作家を集めたこの展覧会は、セルビア人のキュレーター Jelena Stojkovićによる企画展であり、まだ内戦の爪痕の残る街で開催されました。

本展の出品作品には、佐藤が2010年にイムラアートギャラリーで開催した個展「バイバイカモン」のフライヤーを青山がマシン刺繍でトレースした作品、Jelena Stojkovićからの絵葉書の刺繍作品も含まれます。《バイバイカモン》は2012年のセルビアの展覧会でも出展され、それが青山にとって初めて観た佐藤作品でもあります。佐藤は2019年にこの世を去りましたが、青山は「今回の個展も佐藤君の個展も、数百年後の人からしたら誤差の範囲のできごとであり、同時代に開催された展覧会で、同じ時代に生きたということに変わりはない」と言います。

imura art gallery

〒606-8395  
京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町31  
開廊時間：火曜日～土曜日 / 12:00 - 18:00  
休廊日：日・月・祝祭日

Tel : 075-761-7372  
Fax : 075-761-7362  
E-mail : info@imuraart.com



京阪電車：「神宮丸太町」4番出口より徒歩3分  
市バス：「丸太町京阪前」下車徒歩2分

近年、青山は、この変化の激しい社会の中で「消えゆくものたち」を制作のテーマとしてきました。フライヤーをはじめとする紙媒体は、デジタルになりつつあり、紙幣や切符は、キャッシュレス決済によって変わられています。これらの「消えゆくものたち」は、数百年後には本当に消えてなくなっているのかもしれない。逆に残るもの、残していくべきものもあるでしょう。「時間マシン | Time Machine」と名付けられた本展は時間の不可逆性に向き合い、またそれに抗う姿勢を見せながら、労働の価値や人間性の変容について言及します。展示は数百年後の、とある展示室を想定したインスタレーションとなります。是非、遠い未来から見た「今」を想像しながら青山の最新作を楽しんでいただければと思います。

青山は本展を、同時開催となる美術館「えき」KYOTOでの個展「刺繍少年フォーエバー in Kyoto」の最終展示室と位置付けています。こちらをあわせてご覧くださいます。

---

#### 刺繍少年フォーエバー in Kyoto 最終展示室として 「時間マシン | Time Machine」

青山悟

ペリーによってマシンがはじめて日本に持ち込まれたのが1854年。初めて時間旅行を扱ったH・G・ウェルズによる小説「Time Machine」が発表されたのが1895年。今さら言うまでもなく日本人はソーイングマシンのことを「マシン」と呼ぶわけですが、それは明治時代の人々がマシンをマシンと聞き間違えたのが由来だというのは有名な話です。それならばタイム・マシンもタイム・マシンで良さそうだけど、さすがにペリーからウェルズまでの40年もの間にマシンは縫うための道具の名称として定着したであろうことが想像され、タイム・マシンも含めたマシン以外のすべてのマシンは、例えばその後のマシン・ガン、トレーニング・マシン、スロット・マシンなど、ずっとマシンなわけですが。逆にタイム・マシン、マシン・ガン、トレーニング・マシンなど全てのマシンをマシンに置き換えるとマシン本来の機能を越えた、まだ見ぬ未来の道具の姿が浮かび上がったりもします。

ところで自分が学生の時から使っているマシンは1920年代の工業用のシンガー・マシンで、海外ではアイリッシュ・マシンと呼ばれる刺繍専用のものです。日本では横振りマシンとしても知られるこの古いマシンは、既に生産が終了しており、近年調子の良い個体を探すのが困難な状況にあります。いわば消えゆく道具であるこのマシンを使って、同じように消えゆく運命にあるもの（人、物、事象など）たちに光を当て、それらを小さなモニュメントとして残していくことは、自分が生涯をかけて取り組むべき活動であると思うようになりました。これまで制作したものは、タバコの吸い殻やレシート、落ち葉や桜の花びら、新聞や雑誌など多岐に渡りますが、これらには共通して物質としての儚さと共に、特有の物語性があります。そしてその物語は時に古い時代の記憶を呼び起し、現代の社会状況を浮き彫りにし、未来についての考察を促します。つまり自分の制作においてマシンはまるで時間を往来する能力を備えたタイム・マシン（時間マシン）であり、時を止める装置でもあるのです。

---

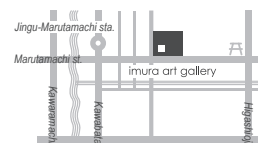
さて、この度イムラアートギャラリーで個展の話をいただいた時、すぐに7年前にこの世を去った友人の佐藤雅晴君のことを思い出しました。正確には日々の生活の中で彼の作品や言葉は頻繁に思い起しているのですが、思い出したというよりも単に関連づけたという方が正しいのですが、自分が出会った頃の佐藤君はイムラアートギャラリーに所属しながら作家活動をしていました。佐藤君とは2012年にセルビアで出会っています。当時、日本の現代アートと写真について研究していたキュレーターのイエレナ・ストイコヴィチさんがセルビアで企画したグループ展に選ばれ、自分と佐藤君、同じくアーティストの城田圭介君が現地に行きました。3人ですぐに意気投合をし、約1週間、毎日仕事だけでなく、観光をしたり、現地の人たちと交流をしたり、もちろん一緒に飲食を共にしながら、大いにアートについて語らいました。帰国後もいつかまた皆でセルビアに行きたいね、と誰からともなく話すほど楽しい旅でした。展覧会自体も小規模ながら、好意的に受け入れられたと思います。このグループ展に佐藤君が出展していた作品のひとつが《バイバイカモン》でした。《バイバイカモン》はロトスコープの技法で作されたアニメーションで、2体の着ぐるみの片方がバイバイのジェスチャーを、もう片方がカモンのジェスチャーをする、今となっては佐藤君のシグネチャーと言ってもよい作品です。正直に言うと、セルビアでの展示以前に彼の作品に目にしたことがなかったのですが、この作品を観てすぐに佐藤雅晴という作家の力量を理解しました。自分より先に亡くなったこの同い年のアーティストは、その死の直前に新宿のKen Nakahashiで「死神先生」(2019)という多くの人の心をつつ個展を開催し、死後に水戸芸術館で大規模な個展「佐藤雅晴 尾行ー存在の不在／不在の存在」(2021)を成功させ、作家として自分の遙か先をいく存在となりました。彼の残した作品は今こうしている時も、新たに解釈され続け、きっと近い未来にまた違った形で蘇るでしょう。そういう意味で、本当に良い作家は肉体が消滅した後もタイムトラベラーとしてこの世に現れ続けます。

今回、個展を開催するにあたり、運良くイムラアートギャラリーから佐藤君が《バイバイカモン》を初めて発表した際のチラシを手に入れることができたので、新作はこのチラシをマシンで再現することから始めることにしました。佐藤君は生前、尾行(トレース)することとは、対象を自分の中に取り込むこと、と述べています。尾行は気づかれずに遂行しなくてはなりません。そう言えば、一度だけ佐藤君の作品に登場させてもらったことがあるのですが、作品を実際に観るまで自分がアニメ化されていることを知りませんでした。今回はこちらが尾行する番です(実は今まで何度か、時に作品として、またレクチャーなどでも彼を尾行しているのですが)。尾行された本人は気づくことはないでしょうが、きっと今回の展示空間は佐藤雅晴の気配を十分に感じさせるものになると思います。そしてこの《バイバイカモン》をモチーフとした新作を起点に、この展示が時間の不可逆性に少しでも抗うような体験になればと思っています。

imura art gallery

〒606-8395  
京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町31  
開廊時間:火曜日~土曜日 / 12:00 - 18:00  
休廊日:日・月・祝祭日

Tel: 075-761-7372  
Fax: 075-761-7362  
E-mail: info@imuraart.com



京阪電車:「神宮丸太町」4番出口より徒歩3分  
市バス:「丸太町京阪前」下車徒歩2分

## 青山 悟

1973 東京都生まれ

1998 ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ（イギリス）テキスタイルアート科卒業

2001 シカゴ美術館附属美術大学大学院（アメリカ）ファイバー&マテリアルスタディーズ科修了、美術学  
修士号取得

## 主な個展、二人展

2026 「時間マシン | Time Machine」 imura art gallery、京都

「青山悟 刺繍少年フォーエバー in Kyoto」美術館「えき」KYOTO、京都

2024 「永遠なんてあるのでしょうか」ミヅマアートギャラリー、東京

「青山悟 刺繍少年フォーエバー」目黒区美術館、東京

2019 「The Lonely Labourer」ミヅマアートギャラリー、東京

2017 「News From Nowhere」ミヅマアートギャラリー、東京

「The Age of Disappearance , Satoru Aoyama×Ken Ikeda」Mizuma Gallery, シンガポール

2016 「Division of Labour」White Rainbow, ロンドン、U.K.

2015 「名もなき刺繍家たちに捧ぐ」ミヅマアートギャラリー、東京

2012 「The Man-Machine (Reprise) Featuring 平石博一」ミヅマアートギャラリー、東京

2011 「芸術家は人生において6本の薔薇を真剣につくらねばならない」ミヅマアートギャラリー、東京

2010 「複合回路ー接触領域」gallery aM、東京

2009 「Glitter Pieces #1-22：連鎖／表裏」ミヅマアートギャラリー、東京

2007 「Ancient Pixels」シカゴ文化センター、ミシガンアヴェニューギャラリー、シカゴ、U.S.A.

「Good Aliens」One in the Other、ロンドン、U.K.

2004 「クリテリウム 60 青山悟」水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城

「夕景」ミヅマアートギャラリー、東京

## 主なグループ展

2025 「セカイノコトワリー私たちの時代の美術」京都国立近代美術館

「刺繍がうまれるときー東京都コレクションにみる日本近現代の糸と針と布による造形」東京都  
美術館

「AWT FOCUS 『リアルとは？』」大倉集古館、東京

「開館 30 周年記念展 日常のコレオ」東京都現代美術館

「ミネバネ！現代アート タグチアートコレクション」秋田県立美術館、秋田市立千秋美術館

「小湊鉄道開業 100 周年記念展「古往今来・発車オーライ！」市原湖畔美術館、千葉

2024 「ファンタジーの力」大田区立龍子記念館、東京

「美術家たちの沿線物語：小田急線篇」世田谷美術館、東京

2023 「あなたのアートを誰に見せますか？」東京藝術大学大学美術館 陳列館

「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」森美術館、東京

---

- 2022 「ドリーム／ランド」神奈川県民ホールギャラリー  
「ヴォイドオブニッポン 77 展 戦後美術史のある風景と反復進行」GYRE GALLERY、東京
- 2021 「Dress Code: Are You Playing Fashion?」ドイツ連邦共和国美術展示館
- 2020 「練馬区立美術館開館 35 周年記念：Re construction 再構築」練馬区立美術館、東京  
「DOMANI・明日展 plus online 2020：〈前夜〉を生きる」（オンライン展示）
- 2019 「ドレス・コード？—着る人たちのゲーム」京都国立近代美術館、熊本市現代美術館ほか  
「Unfolding: Fabric of Our Life」Centre for Heritage, Arts & Textile (CHAT)、香港
- 2017 「驚異の超絶技巧！—明治工芸から現代アートへ」三井記念美術館、東京他 5 会場巡回 (-2019)  
「ヨコハマトリエンナーレ 2017」横浜美術館、横浜赤レンガ倉庫 1 号館ほか、神奈川  
「ESCAPE from the SEA」国立美術館他、クアラルンプール、マレーシア
- 2015 「もう一つの選択 Alternative Choice」横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川  
「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2015」六甲山、兵庫
- 2014 「Find Asia」ヨコハマ創造都市センター、神奈川
- 2013 「Flowers」十和田市現代美術館、青森
- 2012 「メグロアドレス—都会に生きる作家」目黒区美術館、東京  
「Photo Reference: Photographic Image in Contemporary Japanese Art Practices」ベルグラード文化センター、セルビア  
「Storyteller—識る単位」国際芸術センター青森
- 2011 「CAFE in Mito 2011—かかわりの色いろ」水戸芸術館現代美術ギャラリー、茨城
- 2010 「六本木クロッシング 2010 展：アートは可能か？」森美術館、東京
- 2009 「TWIST AND SHOUT: Contemporary Art from Japan」バンコク芸術文化センター、タイ
- 2008 「ネオテニー・ジャパン 高橋コレクション展」霧島アートの森、鹿児島ほか 6 会場巡回 (—2009)  
「The ECHO」ZAIM、東京
- 2006 「ニューアート展 2006 [布と糸のかたち]」横浜市民ギャラリー、神奈川  
「Alllooksame? / Tuttguale? — Art from China, Japan and Korea」Fondazione Sandretto Re Rebaudengo、トリノ、イタリア
- 2004 「Officina Asia」ボローニャ近代美術館、イタリア  
「Boys Who Sew」クラフツカウンシルギャラリー、ロンドン、U.K.

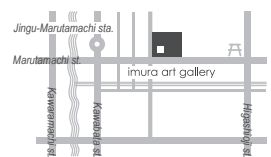
## パブリックコレクション

森美術館、東京 / 高松市美術館、香川 / 練馬区立美術館、東京 / 京都国立近代美術館  
愛知県美術館 / 東京都現代美術館 / 世田谷美術館、東京

imura art gallery

〒606-8395  
京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町31  
開廊時間：火曜日～土曜日 / 12:00 - 18:00  
休廊日：日・月・祝祭日

Tel : 075-761-7372  
Fax : 075-761-7362  
E-mail : info@imuraart.com



京阪電車：「神宮丸太町」4番出口より徒歩3分  
市バス：「丸太町京阪前」下車徒歩2分

## Satoru Aoyama "Time Machine"

Dates: 2026/7/4 (Sat.) ~ 7/25 (Sat.) 12:00 - 18:00

\*Closed on Sundays, Mondays, National Holidays

Venue: imura art gallery In collaboration with MIZUMA ART GALLERY

Opening reception: 7/4 (Sat.) 17:00 - 18:00



《Time Machine》 embroidery with polyester thread on polyester organza, 2026

Photography by MIYAJIMA Kei ©AOYAMA Satoru, Courtesy of Mizuma Art Gallery

---

imura art gallery is pleased to present "Time Machine," a solo exhibition of works by Satoru Aoyama.

Aoyama moved to the UK during his high school years and subsequently studied textile art at Goldsmiths College in London. The program was grounded in gender studies and included a sewing studio, where Aoyama began creating works on an industrial sewing machine.

In 2012, he met Masaharu Sato and Keisuke Shirota at a group exhibition in the Serbian capital of Belgrade, a city that still bore the scars of civil strife. Titled "Photo-Reference: Photographic Image in Contemporary Japanese Art Practices," the exhibition was put together by Serbian curator Jelena Stojković and featured works by Japanese artists who all used photography as a medium but used their own diverse approaches.

"Time Machine" presents creations such as Aoyama's machine-embroidered tracing of the flyer for "Bye Bye Come On"—a solo exhibition held by Sato at this gallery in 2010—and an embroidered representation of a picture postcard sent by Stojković. Sato's work titled *Bye Bye Come On* was also displayed at the 2012 exhibition in Serbia, providing Aoyama with his first taste of the artistry of Sato, who later passed away in 2019.

---

Aoyama notes, “People hundreds of years from now will see little difference between this solo exhibition and Sato’s, but that doesn’t change the fact that both were held in the same era by two artists born in the same era.”

Aoyama’s creative focuses in recent years include exploration of the things that are vanishing from our rapidly changing world. Flyers and other paper media are being replaced with digital versions, while paper money and tickets are being sidelined by cashless payment. These and other vanishing things may truly be gone hundreds of years from now. Conversely, there are things that will remain or that should be preserved. “Time Machine” takes a close look at the irreversible flow of time and while quietly resisting it, touching on the transformation of things like human nature and the value of labor. It is an art installation that imagines a gallery room setting centuries from now. We invite visitors to experience Aoyama’s latest works while imagining our present moment from the perspective of a distant future.

Aoyama considers this exhibition to be the final gallery room for “A Boy Who Sews Forever in Kyoto,” his simultaneous solo showing at Museum 「Eki」 KYOTO. We invite you to also visit that presentation.

### **“Time Machine”**

#### **For the final exhibition room of “A Boy Who Sews Forever in Kyoto”**

By Satoru Aoyama

The sewing machine was first brought to Japan by Commodore Perry in 1854. H.G. Wells’s novel *The Time Machine*, the first literary work to deal with time travel, was published in 1895. As is well known, Japanese people call a sewing machine “mishin,” and it is famously said that this originated from people in the Meiji era mishearing the English word “machine.” If that is the case, then “time machine” could just as easily have become “time mishin.” Yet over the forty years between Perry and Wells, it is easy to imagine that “mishin” had already become firmly established in Japan as the name of a tool for sewing. As a result, every other kind of machine—including the time machine itself—remained simply “machine”: machine gun, training machine, slot machine, and so on. Conversely, if we replace all these “machines” with “mishin”—time mishin, mishin gun, training mishin—then the sewing machine seems to exceed its original function, and begins to evoke the image of unknown tools from a future yet to come.

The sewing machine I have used since my student days is a 1920s industrial Singer embroidery machine, known overseas as an “Irish machine.” In Japan, it is also referred to as a yokofuri mishin (side-to-side sewing machine). Production of this old machine has long since ended, and in recent years it has become increasingly difficult to find one in good working condition. Using this disappearing tool to shed light on things that are themselves destined to disappear—people, objects, events—and leaving them behind as small monuments, has gradually come to feel like the work I should devote my life to. The things I have embroidered so far range

---

widely: cigarette butts, receipts, fallen leaves, cherry blossom petals, newspapers, magazines, and more. What they share is not only a material fragility, but also a distinctive sense of narrative. At times, these narratives call forth memories of past eras, reveal the conditions of contemporary society, and prompt reflections on the future. In this sense, the sewing machine in my practice functions almost like a time machine—what I call a “time mishin”—capable of moving back and forth through time, while also serving as a device that stops time itself.

When imura art gallery approached me about holding this solo exhibition, I immediately thought of my friend Masaharu Sato, who passed away seven years ago. To be precise, his works and words often come back to me in daily life, so perhaps “associated him with this exhibition” would be more accurate than “remembered.” Around the time I first met him, Sato was an artist represented by imura art gallery.

I first met Sato in Serbia in 2012. At the time, the curator Jelena Stojković, who was researching Japanese contemporary art and photography, invited me, Sato, and fellow artist Keisuke Shirota to participate in a group exhibition she organized there. The three of us quickly became close friends. For about a week, we spent every day together—not only working, but sightseeing, meeting local people, eating and drinking together, and talking passionately about art. Even after returning to Japan, we often said that we should all go back to Serbia together someday. It was such an enjoyable trip. The exhibition itself was small in scale, but I believe it was warmly received.

One of the works Sato exhibited in that group show was *Bye Bye Come On*. Created using rotoscope animation, the work features two costumed characters: one repeatedly making a “bye-bye” gesture, the other beckoning with a “come on” gesture. Looking back now, it could even be called one of Sato’s signature works. To be honest, before seeing the exhibition in Serbia, I had never encountered his work. But the moment I saw *Bye Bye Come On*, I immediately understood the strength of Masaharu Sato as an artist.

This artist, who was the same age as me yet died before me, went on to hold the deeply moving solo exhibition “Shinigami Sensei” (2019) at Ken Nakahashi shortly before his death, and after his passing, the large-scale retrospective “Sato Masaharu: Trace—absence of presence / presence of absence” (2021) was presented at Contemporary Art Gallery, Art Tower Mito to great acclaim. In that sense, he became an artist far ahead of me. Even now, his works continue to be reinterpreted, and surely they will reappear in new forms in the near future. Truly great artists continue to appear in this world as time travelers even after their physical bodies have disappeared.

For this exhibition, I was fortunate enough to obtain from imura art gallery the flyer from the very first presentation of *Bye Bye Come On*. I decided to begin my new work by recreating this flyer using the sewing machine. During his lifetime, Sato said that to “trace” someone is to absorb the subject into oneself. Tracing must be carried out without the subject noticing. Come to think of it, Sato once included me in one of his works, but I did not realize I had been animated until I actually saw the finished piece. This time, it is my turn to trail him. (In truth, I have followed him many times before, sometimes through artworks and sometimes in lectures.) The person being followed would probably never notice, but I believe this exhibition space will nevertheless strongly evoke the presence of Masaharu Sato. Beginning with this new work based on *Bye Bye Come On*, I hope this exhibition may become an experience that resists, even if only slightly, the irreversibility of time.

---

## Aoyama Satoru

- 1973 Born in Tokyo, lives and works in Tokyo  
1998 Goldsmiths College, University of London, BA Textiles, Visual Art Department  
2001 The School of the Art Institute of Chicago, MFA Fiber and Material Study Department

## Selected Solo & Two person Exhibitions

- 2026 “Time Machine” imura art gallery, Kyoto  
“A Boy Who Sews Forever in Kyoto” Museum 「EKI」 KYOTO  
2024 “Do you believe in ‘Forever’?” Mizuma Art Gallery, Tokyo  
“A Boy Who Sews Forever” Meguro Museum of Art, Tokyo  
2019 “The Lonely Labourer” Mizuma Art Gallery, Tokyo  
2017 “News From Nowhere” Mizuma Art Gallery, Tokyo  
“The Age of Disappearance, Satoru Aoyama×Ken Ikeda” Mizuma Gallery, Singapore  
2016 “Division of Labour” White Rainbow, London, U.K.  
2015 “Dedicated to Unknown Embroiderers”, Mizuma Art Gallery, Tokyo  
2012 “The Man-Machine (Reprise) Featuring HIRAISHI Hirokazu”, Mizuma Art Gallery, Tokyo  
2011 “Artists Must Earnestly Make Six Roses in Their Lives”, Mizuma Art Gallery  
2010 “COMPLEX CIRCUIT-Contact Zone 5 / Satoru AOYAMA”, αM Gallery, Tokyo  
2009 “Glitter Pieces #1-22”, Mizuma Art Gallery  
2007 “Ancient Pixels”, Chicago Cultural Center, Michigan Avenue Galleries, Chicago, U.S.A.  
“Good Aliens”, One in the Other, London, U.K.  
2004 “Aoyama Satoru Criterium 60”, Contemporary Art Center, Art Tower Mito, Ibaraki  
“YU-KEI”, Mizuma Art Gallery

## Selected Group Exhibitions

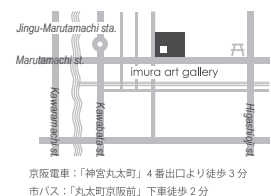
- 2025 “#WhereDoWeStand?—Art in Our Time” The National Museum of Modern Art, Kyoto (Momak)  
“When Embroidery is Born” Tokyo Metropolitan Art Museum  
AWT Focus “What Is Real?” Okura Shukokan Museum of Fine Arts, Tokyo  
“Choreographies of the Everyday” Museum of Contemporary Art Tokyo  
“MINEBANE! Contemporary Art – The Taguchi Art Collection” Akita Museum of Art, Senshu Museum of Art  
“The100th Anniversary of Kominato Railway from the Past to the Present, and toward the Future”  
Ichihara Lakeside Museum, Chiba  
2024 “May It Be Your Tale” Ryushi Memorial Museum, Tokyo  
“Artists Along the Railway Lines: The Odakyu Line” Setagaya Art Museum, Tokyo  
2023 “Who will you show your art to?” Chinretsukan Gallery, The University Art Museum,  
Tokyo University of the Arts  
“WORLD CLASSROOM: Contemporary Art. through School Subjects” Mori Art Museum, Tokyo

---

imura art gallery

〒606-8395  
京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町31  
開廊時間 : 火曜日～土曜日 / 12:00 - 18:00  
休廊日 : 日・月・祝祭日

Tel : 075-761-7372  
Fax : 075-761-7362  
E-mail : info@imuraart.com



京阪電車：「神宮丸太町」4番出口より徒歩3分  
市バス：「丸太町京阪前」下車徒歩2分

---

- 2022 “Dream / Lands” Kanagawa Kenmin Hall Gallery  
“Void of Nippon 77: Postwar Art History Landscape Sequences” GYRE GALLERY, Tokyo
- 2021 “Dress Code: Are You Playing Fashion?” Bundeskunsthalle, Germany 2020  
“Re construction” Nerima Art Museum, Tokyo  
“DOMANI plus Online 2020: Living on the Eve” (online)
- 2019 “Dress Code: Are You Play Fashion?” The National Museum of Art, Kyoto, travelling to Contemporary Art Museum Kumamoto and Tokyo Opera City Art Gallery  
“Unfolding: Fabric of Our Life” Center for Heritage Arts & Textile, Hong Kong 2017  
“Amazing Craftsmanship! From Meiji Kogei to Contemporary Art”, Mitsui Memorial Museum, Tokyo, traveled to five venues (-2019)  
“Yokohama Triennale 2017”, Yokohama Museum of Art, Red Brick Warehouse No.1, and others, Kanagawa  
“ESCAPE from the SEA” National Art gallery, Kuala Lumpur, Malaysia
- 2015 “Alternative Choice”, Yokohama Civic Art Gallery Azamino, Kanagawa  
“Rokko Meets Art 2015”, Rokkosan, Hyogo
- 2014 “Find ASIA”, Yokohama Creative Center, Kanagawa
- 2013 “Flowers”, Towada Art Center, Aomori
- 2012 “Meguro Addresses - Artist in Urban Life”, Meguro Museum of Art, Tokyo  
“Photo Reference: Photographic Image in Contemporary Japanese Art Practices”, Belgrade Cultural Center – The Art Gallery, Belgrade, Serbia  
“Storyteller -Units of Recognition”, Aomori Contemporary Art Center
- 2011 “CAFE in Mito 2011: Relationships in Color”, Contemporary Art Center, Art Tower Mito, Ibaraki
- 2010 “Roppongi Crossing 2010: Can There Be Art?”, Mori Art Museum, Tokyo
- 2009 “TWIST AND SHOUT: Contemporary Art from Japan”, Bangkok Art and Cultural Center, Thailand
- 2008 “Neoteny Japan - from Takahashi Collection”, Kirishima Open Air Museum, Kagoshima, traveled to six venues  
“THE ECHO”, ZAIM, Tokyo
- 2006 “New Art 2006”, Yokohama Civic Gallery, Kanagawa  
“ALLLOOKSAME? /TUTTTUGUALE? – Art from Japan, China and Korea”, The Fondazione Sandretto Re Rebaudengo, Torino, Italy
- 2004 “Officina Asia”, Galleria D’Arte Moderna, Bologna, Italy  
“Boys Who Sew”, Crafts Council, London, U.K.

## Public Collections

Mori Art Museum, Tokyo / Takamatsu Art Museum, Kagawa / Nerima Art Museum, Tokyo, The National Museum of Modern Art, Kyoto /Aichi Prefectural Museum of Art /Museum of Contemporary Art Tokyo / Setagaya Art Museum, Tokyo

---

imura art gallery

〒606-8395  
京都市左京区丸太町通川端東入東丸太町31  
開廊時間：火曜日～土曜日 / 12:00 - 18:00  
休廊日：日・月・祝祭日

Tel : 075-761-7372  
Fax : 075-761-7362  
E-mail : info@imuraart.com

